

風野又三郎

宮沢賢治

青空文庫

だほかに誰も来ていないのを見て

「ほう、おら一等だぞ。一等だぞ。」とかわるがわる叫びながら大悦びで門をはいつて来たのですが、ちよつと教室の中を見ますと、二人ともまるでびっくりして棒立ちになり、それから顔を見合せてぶるぶるふるえました。がひとりはどうとう泣き出してしまいました。というわけはそのしんとした朝の教室のなかにどこから来たのか、まるで顔も知らないおかしな赤い髪の子供がひとり一番前の机にちゃんと座つていたのです。そしてその机といつたらまったくこの泣いた子の自分の机だったのです。もひとりの子ももう半分泣きかけていましたが、それでもむりやり眼をりんと張つてそっちの方をにらめていましたら、ちようどそのとき川上から

「ちやうはあぶどり、ちやうはあぶどり」と高く叫ぶ声がしてそれからいなすまのように嘉助が、かばんをかかえてわらつて運動場へかけて来ました。と思つたらすぐそのあとから佐太郎だの耕助だのどやどやつてきました。

「なして泣いでら、うなかもたのが。」嘉助が泣かないこどもの肩をつかまえて云いました。するとその子もわあと泣いてしまいました。おかしいとおもつてみんながあたりを見ると、教室の中にあの赤毛のおかしな子がすましてしゃんとすわっているのが目につきま

した。みんなはしんとなつてしまいました。だんだんみんな女の子たちも集つて来ましたが誰も何とも云えませんでした。赤毛の子どもは一向こわがる風もなくやっぱりじつと座っています。すると六年生の一郎が来ました。一郎はまるで坑夫こうふのようにゆっくり大股おおまたにやつてきて、みんなを見て「何なした」とききました。みんなはじめてがやがや声をたててその教室の中の変な子を指しました。一郎はしばらくそつちを見ていましたがやがて鞆かばんをしっかりとかがえてさつさと窓の下へ行きました。みんなもすっかり元気になつてついでに行きました。

「誰たれだ、時間にならないに教室へはいつてるのは。」一郎は窓へはいのぼつて教室の中へ顔をつき出して云いました。

「先生にうんと叱しからせるぞ。」窓の下の耕助が云いました。

「叱しからえでもおら知らないよ。」嘉助が云いました。

「早く出はつて来、出はつて来。」一郎が云いました。けれどもそのこどもはきよろきよろ室へやの中やみんなの方を見るばかりでやっぱりちゃんとひぎに手をおいて腰掛こしかけに座つていました。

ぜんたいその形からが実におかしいのでした。変てこな鼠ねずみいろのマントを着て水すいしやう晶

かガラスか、とにかくきれいなすきとおった沓くつをはいていました。それに顔と云つたら、まるで熟した苹果りんごのよう殊ことに眼はまん円でまっくろなものでした。一向語ことばが通じないようなので一郎も全く困つてしまいました。

「外国人だな。」「学校さ入るのだな。」みんなはがやがやがや云いました。ところが五年生の嘉助がいきなり

「ああ、三年生さ入るのだ。」と叫びましたので

「ああ、そうだ。」と小さいこどもらは思いましたが一郎はだまってくびをまげました。

変なこどもはやはりきよろきよろこつちを見るだけきちんと腰掛けています。ところがおかしいことは、先生がいつものキラキラ光る呼子笛ぶえを持っていきなり出入口から出て来られたのです。そしてわらつて

「みなさんお早う。どなたも元気ですね。」と云いながら笛を口にあててピルルと吹ふきました。そこでみんなはきちんと運動場に整列しました。

「気を付けっ」

みんな気を付けをしました。けれども誰の眼もみんな教室の中の変な子に向いていました。先生も何があるのかと思つたらしく、ちよつとうしろを振り向いて見ましたが、なあ

になんでもないという風でまたこつちを向いて

「右いおいっ」と号令をかけました。ところがおかしな子どもはやっぱりちゃんとしかけたままきろきろこつちを見えています。みんなはそれから番号をかけて右向けをして順に入口からはいりましたが、その間中も変な子供は少し額に皺しわを寄せて「以下原稿数枚なし」

と一郎が一番うしろからあまりさわぐものを一人ずつ叱りました。みんなはしんとなりました。

「みなさん休みは面おも白しろかつたね。朝から水泳ぎもできたし林の中で鷹たかにも負けないくらい高く叫んだりまた兄さんの草刈くさかりについて行ったりした。それはほんとうにいいことです。けれどももう休みは終わりました。これからは秋です。むかしから秋は一番勉強のできる時だといつてあるのです。ですから、みなさんも今日から又またしっかり勉強しましょう。みなさんは休み中でいちばん面白かつたことは何ですか。」

「先生。」と四年生の悦治が手をあげました。

「はい。」

「先生さつきたの人あ何だつたべす。」

先生はしばらくおかしな顔をして

「さっきの人……」

「さっきの髪の毛の赤いわらすだんす。」みんなもどつと叫びました。

「先生髪の毛のまつ赤なおかしなやぶだったんす。」

「マント着てたで。」

「笛鳴らないに教室さはいってたぞ。」

先生は困って

「一人ずつ云うのです。髪の毛の赤い人がここに居たのですか。」

「そうです、先生。」〔以下原稿数枚なし〕

の山にのぼってよくそこらを見ておいでなさい。それからあしたは道具をもつてくるのです。それではここまで。」と先生は云いました。みんなもうあの山の上ばかり見ていたのです。

「気を付けつ。」一郎が叫びました。「礼つ。」みんなおじぎをするや否いなやまるで風のよ
うに教室を出ました。それからがやがやその草山へ走ったのです。女の子たちもこつそり

ついでに行きました。けれどもみんなは山にのぼるとがっかりしてしまいました。みんながやっとその栗くりの木のままで行つたときはその変な子はもう見えませんでした。そこには十本ばかりのたけにぐさが先生の云つたとおり風にひるがえっているだけだったので。けれども小さい方のこどもらはもうあんまりその変な子のことばかり考えていたもんですからもうそろそろ厭あきていました。

そしてみんなはわかれてうちへ帰りましたが一郎や嘉助は仲々それを忘れてしまうことはできませんでした。

九月二日

次の日もよく晴れて谷川の波はちらちらひかりました。

一郎と五年生の耕一とは、丁度ごご午後二時に授業がすみましたので、いつものように教室の掃除そうじをして、それから二人一いっしょ緒に学校の門を出しましたが、その時二人の頭の中は、昨日の変な子供で一杯いっぱいになっていました。そこで二人はもう一度、あの青山の栗の木まで行つて見ようと相談しました。二人は鞆わたをきちんと背負い、川を渡わたつて丘おかをぐんぐん登つ

て行きました。

ところがどうです。丘の途とちゅう中の小さな段を一つ越こえて、ひよつと上の栗の木を見ますと、たしかにあの赤髪の鼠色のマントを着た変な子が草に足を投げ出して、だまって空を見上げているのです。今日こそ全く間違まちがいありません。たけにぐさは栗の木の左の方でかすかにゆれ、栗の木のかげは黒く草の上に落ちています。

その黒い影かげは変な子のマントの上にもかかっているのです。二人はそこで胸をどきどきさせて、まるで風のようにかけ上りました。その子は大きな目をして、じつと二人を見ていましたが、逃にげようともしなければ笑いもしませんでした。小さな唇くちびるを強そうにきつと結んだまま、黙だまって二人のかけ上つて来るのを見ていました。

二人はやつとその子の前まで来ました。けれどもあんまり息がはあはあしてすぐには何も云えませんでした。耕一などはあんまりもどかしいもんですから空へ向いて、

「ホツホウ。」と叫んで早く息を吐はいてしまおうとしました。するとその子が口を曲まげて一寸笑ちよつといました。

一郎がまだはあはあ云いながら、切れ切れに叫びました。

「汝うなあ誰たれだ。何うなだ汝うなあ。」

するとその子は落ちついて、まるで大人のようにすっかり答えました。

「風野又三郎。」

「どこの人だ、ロシヤ人か。」

するとその子は空を向いて、はあはあはあはあ笑い出しました。その声はまるで鹿しかの笛のようでした。それからやつとまじめになつて、

「又三郎だい。」とぶつきら棒に返事しました。

「ああ風の又三郎だ。」一郎と耕一とは思わず叫んで顔を見合せました。

「だからそう云つたじゃないか。」又三郎は少し怒おこつたようにマントからとがった小さな手を出して、草を一本むしつてぷいっと投げつけながら云いました。

「そんだらあつちこつち飛んで歩くな。」一郎がたずねました。

「うん。」

「面白いか。」と耕一が言いました。すると風の又三郎は又笑い出して空を見ました。

「うん面白い。」

「昨日何なして逃げた。」

「逃げたんじやないや。昨日は二百十日だい。本当なら兄さんたちと一緒にずうつと北の

方へ行つてゐるんだ。」

「何なして行かなかつた。」

「兄さんが呼びに来なかつたからさ。」

「何て云う、汝うなの兄あいなは。」

「風野又三郎。きまつてゐるじゃないか。」又三郎は又機嫌きげんを悪くしました。

「あ、判わかつた。うなの兄あなも風野又三郎、うないのお父おじさんも風野又三郎だな。」と耕一が言いました。

「そうそう。そうだよ。僕ぼくはどこへでも行くんだよ。」

「支那しなへも行つたか。」

「うん。」

「岩手山へも行つたが。」

「岩手山から今来たんじゃないか。ゆうべは岩手山の谷とまへ泊とまつたんだよ。」

「いいなあ、おらも風になるたいなあ。」

すると風の又三郎はよろこんだの何のつて、顔をまるでりんごのようにかがやくばかり赤くしながら、いきなり立つてきりきりきりつと二三べんかかどで廻まわりました。鼠色のマ

ントがまるでギラギラする白光りに見えました。それから又三郎は座って話し出しました。「面白かったぞ。今朝のはなし聞かせようか、そら、僕は昨日の朝ここに居たろう。」

「あれから岩手山へ行つたな。」耕一がたずねました。

「あつたりまえさ、あつたりまえ。」又三郎は口を曲げて耕一を馬鹿ばかにしたような顔をしました。

「そう僕のはなしへ口を入れないで黙つておいで。ね、そら、昨日の朝、僕はここから北の方へ行つたんだ。途中で六十五回もいねむりをしたんだ。」

「何なしてそんなにひるねした？」

「仕方ないさ。僕たちが起きてはね廻つていようたつて、行くところがなくなればあるけないじゃないか。あるけなくなりや、いねむりだ。きまつたらあ。」

「歩けないたつて立つが座ねまるかして目をさましていればいい。」

「うるさいねえ、いねむりたつて僕がねむるんじゃないんだよ。お前たちがそう云うんじゃないか。お前たちは僕らのじつと立ったり座ったりしているのを、風がねむると云うんじゃないか。僕はわざとお前たちにわかるように云つてるんだよ。うるさいねえ。もう僕、行つちまうぞ。黙つて聞くん。ね、そら、僕は途中で六十五回いねむりをして、その間

考えたり笑つたりして、夜中の一時に岩手山の丁度三合目についたろう。あすこの小屋にはもう人が居ないねえ。僕は小屋のまわりを一ぺんぐるつとまわったんだよ。そしてまっくろな地面をじつと見おろしていたら何だか足もとがふらふらするんだ。見ると谷の底がだいぶ空あいてるんだ。僕らは、もう、少しでも、空いているところを見たらすぐ走つて行かないといけないんだからね、僕はどんどん下りて行つたんだ。谷底はいいねえ。僕は三本の白樺しろかばの木のかげへはいつてじつとしずかにしていたんだ。朝までお星さまを数えたりいろいろこれからの面白いことを考えたりしていたんだ。あすこの谷底はいいねえ。そんなにしずかじやないんだけれど。それは僕の前にまつ黒な崖がけがあつてねえ、そこから一晩中ころころかさかさ石かけや火山灰のかたまつたのやが崩くずれて落ちて来るんだ。けれどもじつとその音を聞いているとね、なかなか面白いんだよ。そして今朝少し明るくなるとその崖がまるで火が燃えているようにまつ赤なんだろう。そうそう、まだ明るくならないうちね、谷の上の方をまつ赤な火がちらちらちらちら通つて行くんだ。櫓ならの木や樺の木が火にすかし出されてまるで鳥からすうり瓜とうろくの燈籠とうろうのように見えたぜ。」

「そうだ。おら去年鳥瓜の燈火あかしこさ拵こさえた。そして縁側えんがわへ吊つるして置いたら風吹いて落ちた。」

と耕一が言いました。

すると又三郎は噴き出してしまいました。

「僕お前の烏瓜の燈籠を見たよ。あいつは奇麗だったねい、だから僕がいきなり衝き当て落してやったんだ。」

「うわあい。」

耕一はただ一言云つてそれから何ともいえない変な顔をしました。

又三郎はおかしくしておかしくてまるで咽喉を波のようにして一生けん命空の方に向いて笑つていましたがやつとこらえて涙を拭きながら申しました。

「僕失敬したよ。僕そのかわり今度いいものを持って来てあげるよ。お前んとこへね、きれいなほこやなぎの木を五本持つて行つてあげるよ。いいだろう。」

耕一はやつと怒るのをやめました。そこで又三郎は又お話をつづけました。

「ね、その谷の上に行く人たちはね、みんな白いきものを着一番はじめの人はたいまつを待つていただろう。僕すぐもう行つて見たくて行つて見たくて仕方なかったんだ。けれどもどうしてもまだ歩けないだろう、そしたらね、そのうちに東が少し白くなって鳥がなき出したろう。ね、あすこにはやぶうぐいすや岩燕やいろいろ居るんだ。鳥がチツチクチツチクなき出したろう。もう僕は早く谷から飛び出したくて飛び出したくて仕方なか

つたんだよ。すると丁度いいことにはね、いつの間にか上の方が大へん空あいてるんだ。さあ僕はひらつと飛びあがった。そしてピウ、ただ一足でさっきの白いきものの人たちのごまで行った。その人たちはね一列になってつつじやなんかの生えた石からをのぼっているだろう。そのたいまつはもうみじかくなって消えそうなんだ。僕がマントをフウとやって通つたら火がぼつぼつと青くうごいてね、とうとう消えてしまったよ。ほんとうはもう消えてもよかつたんだ。東が琥珀こはくのようになって大きなとかげの形の雲が沢山たくさん浮んでいった。

『あ、とうとう消けだ。』と誰たれかが叫んでいた。おかしいのはねえ、列のまん中ごろに一人の少し年老としとつた人が居たんだ。その人がね、年を老たいぎつて大儀なもんだから前をのぼって行く若い人のシャツのはじにね、一寸ちよつととりついたんだよ。するとその若い人が怒いかつてね、『引ひつ張はるなつたら、先刻さつぎたがらいで処とこさ来るづどいつつも引ひつ張はらな。』と叫さけんだ。みんなどつと笑わつたね。僕も笑わつたねえ。そして又一あしでもう頂上ていじやうに来ていたんだ。それからあの昔むかしの火口のあとにはいつて僕は二時間ねむつた。ほんとうにねむつたのさ。するとね、ガヤガヤ云うだろう、見るとさっきの人たちがやつと登のぼつて来たんだ。みんなで火口のふちの三十三の石いしぼとけにね、バラリバラリとお米を投げつけてね、もうみんな早く

頂上へ行こうと競争なんだ。向うの方ではまるで泣いたばかりのような群青ぐんじょうの山脈や杉すぎごけの丘のようなきれいな山にまつ白な雲が所々かかっているだろう。すぐ下にはお苗な代わしろや御釜おかま火口湖がまつ蒼さおに光つて白樺しらかばの林の中に見えるんだ。面白かつたねい。みんなぐんぐんぐん走っているんだ。すると頂上までの処にも一つ坂があるだろう。あそこをのぼるとき又さっきの年とし老よりがね、前の若い人のシャツを引っぱったんだ。怒っていたねえ。それでも頂上に着いてしまうとそれと老よりがガラスの瓶びんを出してちいさなちいさなコップについてそれをそのぶんぶん怒っている若い人に持って行って笑って拜まむまねをして出したんだよ。すると若い人もね、急に笑い出してしまつてコップを押し戻もどしていったよ。そしておしまいとうとうのんだらうかねえ。僕はもう丁度こつちへ来ないといけなかつたもんだからホウと一つ叫んで岩手山の頂上からはなれてしまつたんだ。どうだ面白いだらう。」

「面白いな。ホウ。」と耕一が答えました。

「又三郎さん。お前はままだここに居るのか。」一郎がたずねました。

又三郎はじつと空を見ていました。

「そうだねえ。もう五六日は居るだらう。歩いたつてあんまり遠くへは行かないだらう。」

それでももう九日たつと二百二十日だからね。その日は、事によると僕はタスカロラ海^{かいし}のすつかり北のはじまで行つちまうかも知れないぜ。今日もこれから一寸向うまで行くんだ。僕たちお友達になろうかねえ。」

「はじめから友だちだ。」一郎が少し顔を赤くしながら云いました。

「あした僕は又どつかであうよ。学校から帰る時もし僕がここに居たようならすぐおいでね。みんなも連れて来ていいんだよ。僕はいくらでもいいこと知ってんだよ。えらいだろう。あ、もう行くんだ。さよなら。」

又三郎は立ちあがってマントをひろげたと思うとフィウと音がしてもう形が見えませんでした。

一郎と耕一とは、あした又あうのを楽しみに、丘を下つておうちに帰りました。

九月三日

その次の日は九月三日でした。昼すぎになつてから一郎は大きな声で云いました。

「おう、又三郎は昨日^{また}又来たぞ。今日も来るかも知れないぞ。又三郎の話聞きたいものは

「緒いっしょにあべ。」

残っていた十人の子供らがよろこんで、

「わあつ」と叫びました。

そしてもう早くもみんなが丘おかにかけ上ったのでした。ところが又三郎は来ていないので、みんなは声をそろえて叫びました。

「又三郎、又三郎、どうどつと吹いふで来こ。」

それでも、又三郎は一向来ませんでした。

「風どうと吹いて来こ、豆呉まめら風どうと吹いこで来。」

空には今日も青光りが一杯いっぱいに漲みなぎり、白いまばゆい雲が大きな環わになって、しずかにめぐるばかりです。みんなは又叫びました。

「又三郎、又三郎、どうと吹いて降りこで来。」

又三郎は来ないで、却かえつてみんな見上げた青空に、小さな小さなすき通った渦うず巻まきが、みずすましの様に、ツイツイと、上ったり下ったりするばかりです。みんなは又叫びました。

「又三郎、又三郎、汝うな、何なして早く来ない。」

それでも又三郎はやっぱり来ませんでした。

ただ一疋の鷹が銀色の羽をひるがえして、空の青光を咽喉一杯に呑みながら、東の方へ飛んで行くばかりです。みんなは又叫びました。

「又三郎、又三郎、早く此さ飛んで来。」

その時です。あのすきとおる沓とマントがギラツと白く光って、風の又三郎は顔をまっ赤に熱らせて、はあはあしながらみんなの前の草の中に立ちました。

「ほう、又三郎、待っていたぞ。」

みんなはてんでに叫びました。又三郎はマントのかくしから、うすい黄色のはんけちを出して、額の汗を拭きながら申しました。

「僕ね、もつと早く来るつもりだったんだよ。ところがあんまりさつき高いところへ行きすぎたもんだから、お前達の来たのがわかっていても、すぐ来られなかったんだよ。それは僕は高いところまで行って、そら、あすこに白い雲が環になって光っているらう。僕はあのまん中をつきぬけてもつと上に行つたんだ。そして叔父さんに挨拶して来たんだ。僕の叔父さんなんか偉いぜ。今日だつてもう三十里から歩いてるんだ。僕にも一緒に行こうつて云つたけれどもね、僕なんかまだ行かなくてもいいんだよ。」

「汝うないの叔父さんどごまで行く。」

「僕の叔父さんかい。叔父さんはね、今度ずうつと高いところをまつすぐに北へすすんで
いるんだ。」

叔父さんのマントなんか、まるで冷えてしまっているよ。小さな小さな氷のかけらがさ
らさらぶつかかるんだもの、そのかけらはここから見えやしないよ」

「又三郎さんは去年なも今いま頃ころここへ来たか。」

「去年は今よりもう少し早かつたろう。面おも白しろかつたねえ。九州からまるで一飛ひびに馳かけ
て馳かけてまつすぐに東京へ来たろう。そしたら丁度僕は保久大将の家を通りかかつたんだ。
僕はね、あの人を前にも知っているんだよ。だから面白おもしろくて家の中をのぞきこんだんだ。

障子が二枚はずれてね『すつかり嵐あらしになった』とつぶやきながら障子を立てたんだ。僕は
そこから走はって庭へでた。あすこにはざくろの木がたくさんあるねえ。若い大工がかなづ
ちを腰こしにはさんで、尤もつともらしい顔をして庭の塀へいや屋根を見廻みまわっていたがね、本当はやつこ
さん、僕たちの馳かけまわるのが大変面白おもしろかつたようだよ。唇くちびるがぴくぴくして、いかにもう
れしいのを、無理にまじめになつて歩きまわっていたらしかつたんだ。

そして落ちたざくろを一つ拾かつて嚙かつたろう、さあ僕はおかしくて笑つたね、そこで僕

は、屋敷やしきの塀へいに沿って一寸戻ったんだ。それから俄にわかに叫んで大工の頭の上をかけ抜ぬけたねえ。

ドツドド　ドドウド　ドドウド　ドドウ、

甘いぎくろも吹き飛ばせ

酸すつぱいぎくろも吹き飛ばせ

ホラね、ぎくろの実がばたばた落ちた。大工はあわてたような変なかたちをしてるんだ。僕はもう笑って笑って走った。

電信ばしらの針金を一本切ったぜ、それからその晩、夜どおし馳けてここまで来たんだ。ここを通ったのは丁度あけがただだった。その時僕は、あの高洞山たかほらやまのまつ黒な蛇紋岩じゃもんがんに、一つかみの雲を叩たたきつけて行つたんだ。そしてその日の晩方にはもう僕は海の上うみにいたんだ。海と云つたつて見えはしない。もう僕はゆっくり歩いていたらね。霧きりが一杯にかかつてその中で波がドンブラゴツコ、ドンブラゴツコ、と云つてるような気がするだけさ。今年だつて二百二十日になったら僕は又馳けて行くんだ。面白いなあ。」

「ほう、いいなあ、又三郎さんだちはいいなあ。」

小さな子供たちは一緒に云いました。

すると又三郎はこんどは少し怒りました。

「お前たちはだめだねえ。なぜ人のことをうらやましがるんだい。僕だつてつらいことはいくらもあるんだい。お前たちにもいいことはたくさんあるんだい。僕は自分のことを一向考えもしないで人のことばかりうらやんだり馬鹿ばかにしているやつらを一番いやなんだぜ。僕たちの方ではね、自分を外ほかのものにとくらべることが一番はずかしいことになっているんだ。僕たちはみんな一人一人なんだよ。さつきも云つたような僕たちの一年に一ぺんか二へんの大演習の時にね、いくら早くばかり行つたつて、うしろをふりむいたり並ならんで行くものの足なみを見たりするものがあると、もう誰たれも相手にしないんだぜ。やつぱりお前たちはだめだねえ。外の人とくらべることがばかり考えているんじゃないか。僕はそこへ行くことさつき空で遭あつた鷹がすきだねえ。あいつは天気の良い日なんか、ずいぶん意地の悪いこともあるけれども空をまつすぐに馳かけてゆくから、僕はすきなんだ。銀色の羽をひらりひらりとさせながら、空の青光の中や空の影かげの中を、まつすぐにまつすぐに、まるでどこまで行くかわからない不思議な矢のように馳かけて行くんだ。だからあいつは意地悪で、あまりいい気持はしないけれども、さつきも、よう、あんまり空の青い石を突つつかないでくれつ、て挨拶したんだ。するとあいつが云つたねえ、ふん、青い石に穴があいたら、お

前にも向う世界を見物させてやろうって云うんだ。云うことはずいぶん生意気だけれども僕は悪い気がしなかつたねえ。」

一郎がそこで云いました。

「又三郎さん。おらはお前をうらやましがったんでないよ、お前をほめたんだ。おらはいつでも先生から習っているんだ。本当に男らしいものは、自分の仕事を立派に仕上げることをよろこぶ。決して自分が出来ないからって人をねたんだり、出来たからって出来ない人を見くびったりさない。お前もそう怒らなくてもいい。」

又三郎もよろこんで笑いました。それから一寸立ち上ってきりきりつとかかたで一ペンまわりました。そこでマントがガラガラ光り、ガラスの沓がカチツ、カチツとぶつつかつて鳴ったようでした。又三郎はそれから又座すわって云いました。

「そうだろう。だから僕は君たちも好きなんだよ。君たちばかりでない。子供はみんな好きなんだ。僕がいつでもあらんかぎり叫んで馳おとける時、よろこんできやつきやつ云うのは子供ばかりだよ。一昨日おとといだつてそうさ。ひるすぎから俄かに僕たちがやり出したんだ。そして僕はある峠とうげを通つたね。栗くりの木の青いいがを落したり、青葉までがりがりむしつてやったね。その時峠の頂上を、雨の支度したくもしないで二人の兄弟が通るんだ、兄さんの方は丁

度おまえくらいだったろうかね。」

又三郎は一郎を尖^{とが}った指で指しながら又言葉を続けました。

「弟の方はまるで小さいんだ。その顔の赤い子よりもっと小さいんだ。その小さな子がね、まるでまっ青になってぶるぶるふるえているだろう。それは僕たちはいつでも人間の眼^めから火花を出せるんだ。僕の前に行ったやつがいたずらして、その兄弟の眼を横の方からひどく圧^おつけて、とうとうパチパチ火花が発^たつたように思わせたんだ。そう見えるだけさ、本当は火花なんかないさ。それでもその小さな子は空が紫^{むらさきいろ}色^{いろ}がかった白^{しろ}光^{ひかり}をしてパリパリパリパリと燃えて行くように思ったんだ。そしてもう天地がいまひっくりかえって焼けて、自分も兄さんもお母さんもみんなちりぢりに死んでしまうと思ったんだい。かあいそうに。そして兄さんにまるで石のように堅^{かた}くなって抱^だきついていたね。ところがその大きな方の子はどうだい。小さな子を風のかげになるようにいたわってやりながら、自分もさも氣持がいいというように、僕の方を向いて高く叫んだんだ。そこで僕も少ししゃくにさわったから、一つ大あばれにあばれたんだ。豆つぶぐらいある石ころをばらばら吹きあげて、たたきつけてやったんだ。小さな子はもう本当に大声で泣いたねえ。それでも大きな子はやっぱり笑うのをやめなかったよ。けれどとうとうあんまり弟が泣くもんだか

ら、自分も怖こわくなつたと見えて口がピクツと横の方へまがった、そこで僕は急に気の毒になつて、丁度その時行く道がふさがつたのを幸さいわいに、ぴたつとまるでしずかな湖のように静まつてやつた。それから兄弟と一緒に峠を下りながら横の方の草原から百合ゆりの匂においを二人の方へもつて行つてやつたりした。

どうしたんだらう、急に向うが空あいちまつた。僕は向うへ行くんだ。さよなら。あしたも又来てごらん。又遭えるかも知れないから。」

風の又三郎のすきとおるマントはひるがえり、たちまちその姿は見えなくなりました。みんなはいろいろ今のことを話し合いながら丘を下り、わかれてめいめいの家に帰りました。

九月四日

「サイクルホールの話聞かせてやろうか。」

又三郎はみんなが丘の栗の木の下に着くやいなや、斯こう云つていきなり形をあらわしました。けれどもみんなは、サイクルホールなんて何だか知りませんでしたから、だまつて

いましたら、又三郎はもどかしそうに又言いました。

「サイクルホールの話、お前たちは聴ききたくないかい。聴ききたくないなら早くはつきりそう云つたらいいじゃないか。僕行つちまうから。」

「聴ききたい。」一郎はあわてて云いました。又三郎は少し機きげん嫌を悪くしながらぼつりぼつり話しはじめました。

「サイクルホールは面白い。人間だつてやるだろう。見たことはないかい。秋のお祭なんかにはよくそんな看板を見るんだがなあ、自転車ですりばちの形こうしになった格子こうしの中を馳はけるんだよ。だんだん上にのぼつて行つて、とうとうそのすりばちのふちまで行つた時、片手でハンドルを持つてハンケチなどを振ふるんだ。なかなかあれでひどいだろう。ところ
が僕等がやるサイクルホールは、あんな小さなもんじやない。尤もつとも小さい時もあるにはあるよ。お前たちのかまいたちつていうのは、サイクルホールの小さいのだよ。」

「ほ、おら、かまいたちに足切られたぞ。」

嘉助が叫びました。

「何だつて足を切られた？ 本当かい。どれ足を出してごらん。」

又三郎はずいぶんいやな顔をしながら斯う言いました。嘉助はまつ赤になりながら足を

出しました。又三郎はしばらくそれを見てから、

「ふうん。」

と医者のような物の言い方をしてそれから、

「一寸脈をお見せ。」

と言うのでした。嘉助は右手を出しましたが、その時の又三郎のまじめくさった顔といったら、とうとう一郎は嘔き出しました。けれども又三郎は知らん振りをして、だまって嘉助の脈を見てそれから云いました。

「なるほどね、お前ならことによつたら足を切られるかも知れない。この子はね、大へんからだの皮が薄いんだよ。それに無暗に心臓が強いんだ。腕を少し吸つても血が出るくらいなんだ。殊にその時足をすりむきでもしていたんだらう。かまいたちで切れるさ。」

「何して切れる。」一郎はたずねました。

「それはね、すりむいたところから、もう血がでるばかりにでもなっているだらう。それを空気が押して押さえてあるんだ。ところがかまいたちのまん中では、わり合空気が押さなだらう。いきなりそんな足をかまいたちのまん中に入れると、すぐ血が出るさ。」

「切るのだないのか。」一郎がたずねました。

「切るのじゃないさ、血が出るだけさ。痛くなかつたらう。」又三郎は嘉助に聴きました。
「痛くなかつた。」嘉助はまだ顔を赤くしながら笑いました。

「ふん、そうだろう。痛いはずはないんだ。切れたんじゃないからね。そんな小さなサイクルホールなら僕たちたった一人でも出来る。くるくるまわって走れいいからね。そうすれば木の葉や何かマントにからまつて、丁度うまい工合ぐあいかまいたちになるんだ。ところが大きなサイクルホールはとて一人じゃ出来あしない。小さいのなら十人ぐらい。大きなやつなら大人もはいつて千人だつてあるんだよ。やる時は大抵たいていふたいろあるよ。日がかんかんどこか一とこに照る時か、また僕たちが上と下と反対にかける時ぶつつかつてしまうことがあるんだ。そんな時とまあふたいろにきまつているねえ。あんまり大きなやつは、僕よく知らないんだ。南の方の海から起つて、だんだんこつちにやつてくる時、一寸僕等がはいるだけなんだ。ふうと馳かけて行つて十ぺんばかりまわつたと思うと、もうずつと上の方へのぼつて行つて、みんなゆつくり歩きながら笑つているんだ。そんな大きなやつへうまくはいると、九州からこつちの方まで一ぺんに来ることも出来るんだ。けれどもまあ、大抵は途とちゆう中で高いところへ行つちまうね。だから大きなのはあんまり面白かあないんだ。十人ぐらいでやる時は一番愉快ゆかいだよ。甲州ではじめた時なんかね。はじめ僕が八ヶ

岳たけふもとの麓の野原でやすんでたろう。曇くもった日でねえ、すると向うの低い野原だけ不思議に一日、日が照ってね、ちらちらかげろうが上つていたんだ。それでも僕はまあやすんでいた。そして夕方になったんだ。するとあちこちから

『おいサイクルホールをやるうじやないか。どうもやらなけあ、いけない様だよ。』つてみんなの云うのが聞えたんだ。

『やろう』僕はたち上つて叫さけんだねえ、

『やろう』『やろう』声があつちこちから聞えたね。

『いいかい、じゃ行くよ。』僕はその平地をめぐがけてピーツと飛んで行つた。するといつでもそうなんだが、まっすぐに平地に行かさないんだ。急げば急ぐほど右へまがるよ、尤もそれでサイクルホールになるんだよ。さあ、みんながつづいたらしいんだ。僕はもうまるで、汽車よりも早くなっていた。下に富士川の白い帯を見てかけて行つた。けれども間もなく、僕はずっと高いところのぼつて、しずかに歩いていたねえ。サイクルホールはだんだん向うへ移つて行つて、だんだんみんなもはいつて行つて、ずいぶん大きな音をたてながら、東京の方へ行つたんだ。きつと東京でもいろいろ面白いことをやったねえ。それから海へ行つたろう。海へ行つてこんどは竜たつまき巻をやったにちがいないんだ。竜巻は

ねえ、ずいぶん凄^{すし}いよ。海の中には僕はいったことはないんだけれど、小さいのを沼でやったことがあるよ。丁度お前達の方のご維新^{いしん}前ね、日詰^{ひづめ}の近くに源五沼という沼があったんだ。そのすぐ隣^{とな}りの草はらで、僕等は五人でサイクルホールをやった。ぐるぐるひどくまわっていたら、まるで木も折れるくらい烈^{はげ}しくなってしまった。丁度雨も降るばかりのところだった。一人の僕の友だちがね、沼を通る時、とうとう機^{はず}みで水を掬^{すく}っちゃったんだ。さあ僕等はもう黒雲の中に突き入ってまわって馳^はけたねえ、水が丁度漏^{じょうご}斗^{しり}の尻^{しり}のようになつて来るんだ。下から見たら本当にこわかったろう。

『ああ竜^{りゆう}だ、竜だ。』みんなは叫^いんだよ。実際下から見たら、さっきの水はきらきら白く光^あつて黒雲の中にはいつて、竜のしつぽのように見えたかも知れない。その時友だちがまわるのをやめたもんだから、水はざあつと一ぺんに日詰の町に落ちかかったんだ。その時は僕はもうまわるのをやめて、少し下に降りて見ていたがね、さっきの水の中にいた鮒^{ふな}やなま^なずが、ばらばらと往来や屋根に降^{いた}っていたんだ。みんなは外へ出て恭^{うやうや}恭^{うやうや}しく僕等の方を拜^まんだり、降^{いた}つて来た魚を押し戴^{いた}いていたよ。僕等は竜じやないんだけれども拜^ままれとやっぱりうれしいからね、友だち同志にこにこしながらゆっくりゆっくり北の方へ走^はつて行^いつたんだ。まったくサイクルホールは面白^{おもしろ}いよ。

それから逆サイクルホールというのもあるよ。これは高いところから、さっきの逆にまわって下りてくることなんだ。この時ならば、そんなに急なことはない。冬は僕等は大抵シベリヤに行つてそれをやつたり、そつちからこつちに走つて来たりするんだ。僕たちがこれをやつてる間はよく晴れるんだ。冬ならば咽喉のどを痛くするものがたくさん出来る。けれどもそれは僕等の知つたことじゃない。それから五月か六月には、南の方では、大抵支那なの揚子江ようすこうの野原で大きなサイクルホールがあるんだよ。その時丁度北のタスカロー海かいしよう床いしようの上では、別に大きな逆サイクルホールがある。両方だんだんぶつつかるとそこが梅雨つゆになるんだ。日本が丁度それにあたるんだからね、仕方がないや。けれどもお前達のところは割合北から西へ外れてるから、梅雨らしいことはあんまりないだろう。あんまりサイクルホールの話をしたから何だか頭がぐるぐるしちやつた。もうさよなら。僕はどこへも行かないんだけれど少し睡ねむりたいんだ。さよなら。」

又三郎のマントがぎらつと光つたと思うと、もうその姿は消えて、みんなは、はじめてほうと息をつきました。それからいろいろいまのことを話しながら、丘を下つて銘銘めいめいわかれておうちへ帰つて行つたのです。

九月五日

「僕は上海シャンハイだつて何べんも知つてるよ。」みんなが丘へのぼつたとき又三郎がいきなりマントをぎらつとさせてそこらの草たぐひへ橙だいだいや青の光を落しながら出て来てそれから指をひろげてみんなの前に突き出して云いました。

「上海と東京は僕たちの仲間なら誰たれでもみんな通りたがるんだ。どうしてか知つてるかい。」

又三郎はまつ黒な眼を少し意地わるそうにくりくりさせながらみんなを見まわしました。けれども上海と東京ということは一郎も誰も何のことかわかりませんでしたからお互たがひしばらく顔を見合せてだまつていましたら又三郎がもう大得意でにやにや笑いながら言つたのです。

「僕たちの仲間はみんな上海と東京を通りたがるよ。どうしてつて東京には日本の中央氣象台があるし上海には支那の中華ちゅうか大氣象台があるだろう。どつちだつて偉えらい人がたくさん居るんだ。本当は氣象台の上をかけるときは僕たちはみんな急ぎたがるんだ。どうしてつて風力計がくるくるくるくる廻まわつていて僕たちのレコードはちゃんと下の機械に出て新

聞にも載るんだらう。誰だつていいレコードを作りたからそれはどうしても急ぐんだよ。けれども僕たちの方のきめでは気象台や測候所の近くへ来たからつて俄にわかに急いだりすることは大へん卑ひきょう怯ひやうなことにされてあるんだ。お前たちだつてきつとそうだらう、試験の時はばかりむやみに勉強したりするのはいけないことになつてるだらう。だから僕たちも急ぎたくたつてわざと急がないんだ。そのかわりほんとうに一生けん命かけてる最中に気象台へ通りかかるときはうれしいねえ、風力計をまるでのぼせるくらいにまわしてピーツとかけぬけるだらう、胸もすつとなるんだ。面おも白しろかつたねえ、一昨年だつたけれど六月ころ僕丁度上海に居たんだ。昼の間には海から陸へ移つて行き夜には陸から海へ行つたねえ、大抵朝は十時頃じゅうしころ海から陸の方へかけぬけるようになっていたんだがそのときはいつでも、うまい工合ぐあいに気象台を通るようになるんだ。すると気象台の風力計や風信器や置いてある屋根の上のやぐらにいつでも一人の支那人の理学博士と子供の助手とが立っているんだ。博士はだまつていたが子供の助手はいつでも何か言っているんだ。そいつは頭をくりくりの芥子坊主けしぼうずにしてね、着物だつて袖そでの広い支那服だらう、沓くつもはいてるねえ、大へんかあいらしいんだよ、一番はじめの日僕がそこを通つたら斯こう言つていた。

『これはきつと颯風さつふうですね。ずぶんひどい風ですね。』

すると支那人の博士が葉巻をくわえたままふんふん笑つて

『家が飛ばないじゃないか。』

と云うと子供の助手はまるで口を尖らせて、

『だつて向うの三角旗や何かはたばた云つてます。』というんだ。博士は笑つて相手にしないで壇を下りて行くねえ、子供の助手は少し悄気ながら手を拱いてあとから恭々しくついで行く。

僕はそのとき二・五米というレコードを風力計にのこして笑つて行つてしまつたんだ。

次の日も九時頃僕は海の霧の中で眼がさめてそれから霧がだんだん融けて空が青くなりお日さまが黄金のぼらのようにかがやき出したころそろそろ陸の方へ向つたんだ。これは仕方ないんだよ、お日さんさえ出たらきつともう僕たちは陸の方へ行かなければならないよになるんだ、僕はだんだん岸へよつて鷗が白い蓮華の花のように波に浮んでいるのも見たし、また沢山のジャンクの黄いろの帆や白く塗られた蒸気船の舷を通つたりなんかして昨日の氣象台に通るかかると僕はもう遠くからあの風力計のくるくるくるくる廻るのを見て胸が踊るんだ。すつとかけぬけただろう。レコードが一秒五米と出たねえ、そのとき下を見ると昨日の博士と子供の助手とが今日も出て居て子供の助手がやつぱり云つているん

だ。

『この風はたしかに颶風ぐふうですね。』

支那人の博士はやつぱりわらつて気がないように、

『かわら瓦も石も舞まい上らんじやないか。』と答えながらも壇を下りかかるんだ。子供の助手はまるで一生けん命になつて

『だつて木の枝えだが動いてますよ。』と云うんだ。それでも博士はまるで相手にしないねえ、僕もその時はもう气象台をずうつとはなれてしまつてあとどうなつたか知らない。

そしてその日はずうつと西の方の瀬戸物の塔とうのあるあたりまで行つてぶらぶらし、その晩十七夜のお月さまの出るころ海もとへ戻つて睡つたんだ。

ところがその次の日もなんだ。その次の日僕がまた海からやつて来てほくほくしながらもう大分の早足で气象台を通りかかつたらやつぱり博士と助手が二人出ていた。

『こいつはもう本とうの暴風ですね、』また又あの子供の助手がもつとも尤らしい顔つきで腕うでを拱こいてそう云つてゐるだろう。博士はやつぱり鼻であしらうといった風で

『だつて木が根こぎにならんじやないか。』と云うんだ。子供はまるで顔をまっ赤にして『それでもどの木もみんなぐらぐらしてますよ。』と云うんだ。その時僕はもうあとを見

なかった。なぜってその日のレコードは八米だからね、そんなに気象台の所にばかり永くとまってるわけには行かなかつたんだ。そしてその次の日だよ、やっぱり僕は海へ帰っていたんだ。そして丁度八時ころから雲も一ぱいにやって来て波も高かった。僕はこの時はもう両手をひろげ叫び声をあげて気象台を通った。やっぱり二人とも出ていたねえ、子供は高い処とこなもんだからもうぶるぶる顫ふるえて手すりにとりついてるんだ。雨も幾いくつぶか落ちたよ。そんなにこわそうにしながらまた斯う云っているんだ。

『これは本当の暴風ですね、林ががあがあ云つてますよ、枝も折れてますよ。』

ところが博士は落ちついてからだを少しまげながら海の方へ手をかざして云ったねえ

『うん、けれどもまだ暴風というわけじゃないな。もう降りよう。』僕はその語ことばをきれぎれに聴ききながらそこをはなれたんだそれからもうかけてかけて林を通るときは木をみんな

狂きやうじん人のようにゆすぶらせ丘を通るときは草も花もめっちゃめっちゃにたたきつけたんだ、

そしてその夕方までに上シャンハイ海から八十里も南西の方の山の中に行つたんだ。そして少し疲つかれたのでみんなとわかれてやすんでいたらその晩また僕たちは上海から北の方の海へ抜ぬけて今度はもうまっすぐにこつちの方までやって来るということになつたんだ。そいつは低気圧だよ、あいつに従ついて行くことになつたんだ。さあ僕はその晩中あしたもう一ぺん

上海の气象台を通りたいといくら考えたか知れやしない。ところがうまいこと通つたんだ。そして僕は遠くから風力計の腕わんがまるで眼にも見えない位速くまわっているのを見、又あの支那人の博士が黄いろなレーンコートを着子供の助手が黒い合羽かっぱを着てやぐらの上に立つて一生けん命空を見あげているのを見た。さあ僕はもう笛ふえのように鳴りいはずまのように飛んで

『今日は暴風ですよ、そら、暴風ですよ。今日は。さよなら。』と叫びながら通つたんだ。もう子供の助手が何を云つたかただその小さな口がぴくつとまがつたのを見ただけ少しも僕にはわからなかった。

そうだ、そのときは僕は海をぐんぐんわたつてこつちへ来たけれども来る途とちゆう中でだんだんかけるのをやめてそれから丁度五日目にここも通つたよ。その前の日はあの水沢の臨時いんど度観測所も通つた。あすこは僕たちの日本では東京の次に通つたがる所なんだよ。なぜつてあすこを通るとレコードでも何でもみな外国の方まで知れるようになることがあるからなんだ。あすこを通つた日は丁度お天気だったけれど、そうそう、その時は丁度日本では入にゆうばい梅ばいだったんだ、僕は観測所へ来てしばらくある建物の屋根の上にやすんでいたねえ、やすんで居たつて本当は少しとろとろ睡つたんだ。すると俄かに下で

『大丈夫です、すっかり乾かわきましたから。』と云う声ができるんだろう。見ると木村博士と氣象の方の技手ぎてとがラケットをさげて出て来ていたんだ。木村博士は瘡やせて眼のキヨロキヨロした人だけれども僕はまあ好きだねえ、それに非常にテニスがうまいんだよ。僕はしばらく見てたねえ、どうしてもその技手の人はかなわない、まるつきり汗あせだらけになってよろよろしているんだ。あんまり僕も氣の毒になったから屋根の上からじっとボールの往来をにらめてすきを見て置いてねえ、丁度博士がサーヴをつかつたときふうつと飛び出して行って球を横の方そへ外そらしてしまつたんだ。博士はすぐもう一つの球を打ちこんだねえ。そいつは僕は途中に居て途方もなく遠くへけとばしてやつた。

『こんな筈はずはないぞ。』と博士は云つたねえ、僕はもう博士にこれ位云わせれば沢山だと思つて観測所をはなれて次の日丁度ここへ来たんだよ。ところでね、僕は少し向うへ行かなくちゃいけないから今日はお別れしよう。さよなら。』

又三郎はすつと見えなくなつてしまいました。

みんなは今日は又三郎ばかりあんまり勝手なことを云つてあんまり勝手に行つてしまつたりするもんですから少し変な氣もしましたが一所に丘を降りて帰りました。

九月六日

一昨日おとといからだんだん曇つて来た。それはとうとうその朝は低い雨雲を下してまるで冬にでも降るようなまっすぐなしずかな雨がやつと穂ほを出した草や青い木の葉にそそぎました。

みんなは傘かさをさしたり小さな簗みのからすきとおるつめたい雫しずくをぼたぼた落したりして学校に来ました。

雨はたびたび霽はれて雲も白く光りましたけれども今日は誰たれもあんまり教室の窓からあの丘くりの栗くりの木の処を見ませんでした。又三郎などもはじめこそはほんとうにめずらしく奇きたい体たいだったのですがだんだんなれて見ると割合ありふれたことになってしまつてまるで東京からふいに田舎いなかの学校へ移つて来た友だちぐらいにしか思われなくなつて来たのです。

おひるすぎ授業が済んでからはもう雨はすっかり晴れて小さな蝉せみなどもカンカン鳴きはじめたりしましたけれども誰も今日はあの栗の木の処へ行こうとも云わず一郎も耕一も学校の門の処で「あばえ。」と言つたきり別れてしまいました。

耕一の家は学校から川添かわぞいに十五町ばかり溯のぼつた処にありました。耕一の方から来ている子供では一年生の生徒が二人ありましたけれどもそれはもう午前中に帰つてしまつてい

ましたし耕一はかぼんと傘を持ってひとりみちを川上の方へ帰って行きました。みちは岩の崖がけになった処の中ごろを通るのでずいぶん度々山たびたびの窪くぼみや谷に添ってまわらなければなりませんでした。ところどころには湧水わきみずもあり、又みちの砂だつてまっ白で平らでしたから耕一は今日も足駄あしだをぬいで傘と一緒いっしょにもつて歩いて行きました。

まがり角を二つまわつてもう学校も見えなくなり前にもうしろにも人は一人も居ず谷の水だけ崖の下で少し濁にごつてごうごう鳴るだけ大へんさびしくなりましたので耕一は口笛くちぶえを吹ふきながら少し早足に歩きました。

ところが路みちの一とこに崖からからだをつき出すようにした榎ならや樺かばの木が路に被かぶさつたところがありました。耕一が何気なくその下を通りましたら俄にわかに木がぐらつとゆれてつめたい雪が一ぺんにぎつと落ちて来ました。耕一は肩かたからせなかから水へ入つたようになりました。それほどひどく落ちて来たのです。

耕一はその梢こすえをちよつと見あげて少し顔を赤くして笑いながら行き過ぎました。

ところが次の木のトンネルを通るとき又ぎつとその雪が落ちて来たのです。今度はもうすつかりからだまで水がしみる位にぬれました。耕一はぎよつとしましたけれどもやつぱり口笛を吹いて歩いて行きました。

ところが間もなく又木のかぶさった処を通るようになりました。それは大へんに今までとはちがって長かったのです。耕一は通る前に一ぺんその青い枝を見あげました。雫はいっぱいにたまって全く今にも落ちそうには見えませんでしたしおまけに二度あることは三度あるとも云うのでしたから少し立ちどまって考えて見ましたけれどもまさか三度が三度とも丁度下を通るときそれが落ちて来るといふことはないと思つて少しびくびくしながらその下を急いで通つて行きました。そしたらやつぱり、今度もぎあつと雫が落ちて来たのです。耕一はもう少し口がまがつて泣くようになって上を見あげました。けれども何とも仕方ありませんでしたから冷たさに一ぺんぶるつとしながらも少し行きました。すると、又ぎあと来たのです。

「誰だ。誰だ。」耕一はもうきつと誰かのいたずらだと思つてしばらく上をにらんでいましたがしんとして何の返事もなくなつただ下の方で川がごうごう鳴るばかりでした。そこで耕一は今度は傘をさして行こうと思つて足駄を下におろして傘を開きました。そしたら俄にわかにどうつと風がやつて来て傘はぱつと開きあぶなく吹き飛ばされそうになりました、耕一はよろよろしながらしつかり柄えをつかまえていましたらとうとう傘はがりがり風にこわされて開いた葦きのこのような形になりました。

耕一はどうとう泣き出してしまいました。

すると丁度それと一緒に向うではあはあ笑う声でしたのです。びっくりしてそちらを見ましたらそいつは、そいつは風の又三郎でした。ガラスのマントも雫でいっぱい髪の毛ぬれて東たはになり赤い顔からは湯気さえ立てながらはあはあはあはあふいごのように笑っていました。

耕一はあたりがきいんと鳴るように思ったくらい怒おこってしまいました。

「何なに為すあ、ひとの傘ぶつかして。」

又三郎はいよいよひどく笑ってまるでそこら中ころげるようにしました。

耕一はもうこらえ切れなくなつて持つていた傘をいきなり又三郎に投げつけてそれから泣きながら組み付いて行きました。

すると又三郎はすばやくガラスマントをひろげて飛びあがってしまいました。もうどこへ行つたか見えないのです。

耕一はまだ泣いてそらを見上げました。そしてしばらく口惜くやしさにしくしく泣いていました。がやつとあきらめてその壊こわれた傘も持たずうちへ帰つてしまいました。そして縁えん側がわから入ろうとしてふと見ましたらさっきの傘がひろげて干してあるのです。照井耕一とい

う名もちやんと書いてありましたし、さつきはなれた処もすっかりくつつききれた糸も外ほかの糸でつないでありました。耕一は縁側に座りながらとうとう笑い出してしまったのです。

九月七日

次の日は雨もすっかり霽れました。日曜日でしたから誰たれも学校に出ませんでした。ただ耕一は昨日又三郎にあんなひどい悪いたずら戯あそびをされましたのでどうしても今日は遭あつてうんとひどくいじめてやらなければと思つて自分一人でもこわかつたもんですから一郎をさそつて朝の八時頃ころからあの草山の栗の木の下に行つて待つていました。

すると又三郎の方でもどう云うつもりか大へんに早く丁度九時ころ、丘の横の方から何か非常に考え込んだような風をして鼠ねずみいろのマントをうしろへはねて腕組みをして二人の方へやつて来たのでした。さあ、しつかり談判しなくちゃいけないと考えて耕一はどきつとしました。又三郎はたしかに二人の居たのも知つていたようでしたが、わざといかにも考え込んでいるという風で二人の前を知らないふりして通つて行こうとしました。

「又三郎、うわあい。」耕一はいきなりどなりました。又三郎はぎよつとしたようにふり

向いて、

「おや、お早う。もう来ていたのかい。どうして今日はこんなに早いんだい。」とたずねました。

「日曜でさ。」一郎が云いました。

「ああ、今日は日曜だったんだね、僕ぼくすっかり忘れていた。そうだ八月三十一日が日曜だったからね、七日目で今日が又日曜なんだね。」

「うん。」一郎はこたえました。が耕一はぷりぷり怒っていました。又三郎が昨日のことなど一言も云わずあんまりそらぞらしいもんですからそれに耕一に何も云われないように又日曜のことなどばかり云うもんですからじつさいやくにさわったのです。そこでとうとういきなり叫さけびました。

「うわあい、又三郎、汝うななどあ、世界に無くてもいいな。うわあい。」
すると又三郎はするそうに笑いました。

「やあ、耕一君、お早う。昨日はずいぶん失敬したね。」

耕一は何かもっと別のことを言おうと思いましたがあんまり怒ってしまつて考え出すことができませんでしたので又同じように叫びました。

「うわあい、うわあいだが、又三郎、うななどあ世界中に無くてもいいな、うわあい。」

「昨日は実際失敬したよ。僕雨が降つてあんまり気持ちが悪かったもんだからね。」

又三郎は少し眼をパチパチさせて気の毒そうに云いましたけれども耕一の怒りは仲々解けませんでした。そして三度同じことを繰り返したのです。

「うわあい、うななどあ、無くてもいいな。うわあい。」

すると又三郎は少し面白くなつたようでした。いつもの通りずるそうに笑つて斯う訊ねました。

「僕たちが世界中になくてもいいってどう云うんだい。箇条を立てて云つてごらん。それ。」

耕一は試験のようだしつまらないことになつたと思つて大へん口惜しかったのですが仕方なくしばらく考えてから答えました。

「汝などあ悪戯ばりさな。傘ぶつ壊したり。」

「それから？ それから？」又三郎は面白そうに一足進んで云いました。

「それから、樹折つたり転覆したりさな。」

「それから？ それから、どうだい。」

「それから、稲も倒さな。」

「それから？ あとはどうだい。」

「家もぶつ壊さな。」

「それから？ それから？ あとはどうだい。」

「砂も飛ばさな。」

「それから？ あとは？ それから？ あとはどうだい。」

「シャツポも飛ばさな。」

「それから？ それから？ あとは？ あとはどうだい。」

「それから、うう、電信ばしらも倒さな。」

「それから？ それから？ それから？」

「それから、塔も倒さな。」

「アアハハハ、塔は家のうちだい、どうだいまだあるかい。それから？ それから？」

「それから、うう、それから、」耕一はつまってしまいました。大抵もう云ってしまつたのですからいくら考えてももう出ませんでした。

又三郎はいよいよ面白そうに指を一本立てながら

「それから？ それから？ ええ？ それから。」と云うのでした。耕一は顔を赤くしてしばらく考えてからやつと答えました。

「それがら、風車もぶつ壊さな。」

すると又三郎は今度こそはまるで飛びあがって笑ってしまいました。笑って笑って笑いました。マントも一緒にひらひら波を立てました。

「そうらごらん、とうとう風車などを云つちやった。風車なら僕を悪く思つちやいなんだよ。勿論時々壊すこともあるけれども廻してやるときの方がずうつと多いんだ。風車ならちつとも僕を悪く思つちやいなんだ。うそと思つたら聴いてごらん。お前たちはまるで勝手だねえ、僕たちがちつとばつかしいたずらすることは大業おおぎように悪口を云つていとこはちつとも見ないんだ。それに第一お前のさつきからの数えようがあんまりおかしいや。うう、ううてばかりいたんだろう。おしまいはどうとう風車なんか数えちやつた。ああおかしい。」

又三郎は又泪なみだの出るほど笑いました。

耕一もさつきからあんまり困つたために怒っていたのもだんだん忘れて来ました。そしてついで又三郎と一所にわらいだしてしまつたのです。さあ又三郎のよろこんだこと俄かに

しゃべりはじめました。

「ね、そら、僕たちのやるいたずらで一番ひどいことは日本ならば稲を倒すことだよ、二百十日から二百二十日ころまで、昔はその頃ほんとうに僕たちはこわがられたよ。なぜつてその頃は丁度稲に花のかかるときだろう。その時僕たちにかげられたら花がみんな散つてしまつてまるで実にならないだろう、だから前は本当にこわがったんだ、僕たちだつてわざとするんじゃない、どうしてもその頃かけなくちやいかないからかけるんだ、もう三四日たてばきつと又そうなるよ。けれどもいまはもう農業が進んでお前たちの家の近くのどでは二百十日のころになど花の咲いている稲なんか一本もないだろう、大抵もう柔らかな実になつてるんだ。早い稲はもうよほど硬くさえなつてるよ、僕らがかけるいて少し位倒れたつてそんなにひどくとりいれが減りはしないんだ。だから結局何でもないさ。それから一つは木を倒すことだよ。家を倒すなんてそんなことはほんの少しだからね、木を倒すことだよ、これだつて悪戯じゃないんだよ。倒れないようにして置けあいんだ。葉の潤い樹なら丈夫だよ。僕たちが少しぐらいひどくぶつつかつても仲々倒れやしない。それに林の樹が倒れるなんかそれは林の持主が悪いんだよ。林を伐るときはね、よく一年中の強い風向を考えてその風下の方からだんだん伐つて行くんだよ。林の外側の木は強い

けれども中の方の木はせいばかり高くて弱いからよくそんなことも気をつけなければいんだ。だからまず僕たちのこと悪く云う前によく自分の方に気をつけりやいなだよ。海岸ではね、僕たちが波のしぶきを運んで行くとすぐ枯れるやつも枯れないやつもあるよ。苹果や梨やまるめるや胡瓜はだめだ、すぐ枯れる、稲や薄荷やだいこんなどはなかなか強い、牧草なども強いねえ。」

又三郎はちよつと話をやめました。耕一もすつかり機嫌を直して云いました。

「又三郎、おれああんまり怒で悪がた。許せな。」

すると又三郎はすつかり悦びました。

「ああありがとう、お前はほんとうにきつぱりしていい子供だねえ、だから僕はおまえはすきだよ、すきだから昨日もいたずらしたんだ、僕だつていたずらはするけれど、いいこととはもつと沢山するんだよ、そら数えてごらん、僕は松の花でも楊の花でも草棉の毛でも運んで行くだろう。稲の花粉だつてやつぱり僕らが運ぶんだよ。それから僕が通ると草木はみんな丈夫になるよ。悪い空気も持つて行っていい空気も運んで来る。東京の浅草のまるで濁つた寒天のような空気をうまく太平洋の方へさらつて行って日本アルプスのいい空気だつて代りに持つて行ってやるんだ。もし僕がいなかったら病気も湿気もいくらふ

えるか知れないんだ。ところで今日はお前たちは僕にあうためにばかりここへ来たのかい。けれども僕は今日は十時半から演習へ出なけあいけないからもう別れなけあならないんだ。あした又来ておくれ。ね。じゃ、さよなら。」

又三郎はもう見えなくなっていました。一郎と耕一も「さよなら」と云いながら丘を下りて学校の誰たれもいない運動場で鉄棒にとりついたりいろいろ遊んでひるころうちへ帰りました。

九月八日

その次の日は大へんいい天気でした。さらには霜しもの織物のような又白い孔雀くじゃくのはねのような雲がうすくかかってその下を鳶とんびが黄金きんいろに光ってゆるく環わをかいて飛びました。みんなは、

「とんびとんび、とつとび。」とかわるがわるそっちへ叫びながら丘をのぼりました。そしていつもの栗くりの木の下へかけ上るかあがらないうちにもう又三郎のガラスの沓くつがキラツと光って又三郎は一昨日おとといの通りまじめくさった顔をして草に立っていました。

「今日は退屈たいくつだったよ。朝からどこへも行きやしない。お前たちの学校の上を二三べんあるいたし谷底へ二三べん下りただけだ。ここらはずいぶんいい処ところだけれどもやつぱり僕はもうあきたねえ。」又三郎は草に足を投げ出しながら斯う云いました。

「又三郎さん北極だの南極だのおべだな。」

一郎は又三郎に話させることになれてしまつて斯う云つて話を釣り出そうとしました。すると又三郎は少し馬鹿にしたように笑つて答えました。

「ふん、北極かい。北極は寒いよ。」

ところが耕一は昨日からまだ怒おこつていましたしそれにいまの返事が大へんやくにさわりましたので

「北極は寒いかね。」とふざけたように云つたのです。さあすると今度は又三郎がすっかり怒つてしまいました。

「何だい、お前は僕をばかにしようと思つてるのかい。僕はお前たちにばかにされあしないよ。悪口を云うならもう少し上手にやるんだよ。何だい、北極は寒いかねつてのは、北極は寒いかね、ほんとうに田舎くさいねえ。」

耕一も怒りました。

「何した、汝などぞだら東京だが。一年中うろろど歩つてばかり居でいざずらばがりさな。」

ところが奇体なことは、斯う云つたとき、又三郎が又俄かによるこんで笑い出したのです。

「もちろん僕は東京なんかじやないさ。一年中旅行さ。旅行の方が東京よりは偉いんだよ。旅行たつて僕のはうろろじやないや。かけるときはきいつとかけるんだ。赤道から北極まで大循環さえやるんだ。東京なんかよりいくらいいか知れない。」

耕一はまだ怒つてにぎりこぶしをにぎつていましたけれども又三郎は大機嫌でした。

「北極の話聞かせないが。」一郎が又云いました。すると又三郎はもつとひどくにごにこにしました。

「大循環の話なら面白いけれどむずかしいよ。あんまり小さな子はわからないよ。」

「わかる。」一年生の子が顔を赤くして叫びました。

「わかるかね。僕は大循環のことを話すのはほんとうはすきなんだ。僕は大循環は二遍やつたよ。尤も一遍は途中からやめて下りたけれど、僕たちは五遍大循環をやつて来ると、もうそれ幅が利くんだからね、だからみんなでかけるんだよ、けれども仲々うまく行か

ないからねえ、ギルバート群島からのぼって発^たつたときはうまくいったけれどねえ、ボルネオから発つたときはすっかりしくじっちゃったんだ。それでも面白かったねえ、ギルバート群島の中の何と云う島かしら小さいけれども白^{しろかべ}壁の教会もあった、その島の近くに僕は行つたねえ、行^いくたつて仲々容易じやないや、あすこらは赤道無風帯ってお前たちが云うんだろう。僕たちはめつたに歩けやしない。それでも無風帯のはじの方から舞^まい上つたんじや中々高いところへ行かないし高いところへ行かなきゃ北極だなんて遠い処^{とこ}へも行けなから誰^{たれ}でもみんななるべく無風帯のまん中へ行こう行こうとするんだ。僕は一生けん命すきをねらつてはひるのうちに海から向うの島へ行くようにし夜のうちに島から又向うの海へ出るようにして何べんも何べんも戻^{もど}つたりしなからやつとすっかり赤道まで行つたんだ。赤道には僕たちが見るとちやんと白い指導標が立っているよ。お前たちが見たんじやわかりやしない。大循環志願者出発線、これより北極に至る八千九百ベエスター南極に至る八千七百ベエスターと書いてあるんだ。そのスタートに立って僕は待っていたねえ、向うの島の椰子^{やし}の木は黒いくらい青く、教会の白壁は眼^めへしみる位白く光っているだろう。だんだんひるになつて暑くなる、海は油のようにとろつとなつてそれでもほんの申しわけに白い波^{なみ}がしらを振^ふっている。

ひるすぎの二時頃になったろう。島で銅鑼どらがだるそうにぼんぼんと鳴り椰子の木もパンの木も一ぱいからだをひろげてだらしなくねむっているよう、赤い魚も水の中でもうふらふら泳いだりじつととまったりして夢ゆめを見ているんだ。その夢の中で魚どもはみんな青ぞらを泳いでいるんだ。青ぞらをぷかぷか泳いでいると思っっているんだ。魚というものは生意気なもんだねえ、ところがほんとうは、その時、空を騰のぼって行くのは僕たちなんだ、魚じゃないんだ。もうきつとその辺にさえ居れや、空へ騰のぼって行かなくちやいけないような気がするんだ。けれどもものぼって行くたつてそれはそれはそおつとのぼって行くんだよ。椰子の樹の葉にもさわらず魚の夢もささないようにまるでまるでそおつとのぼって行くんだ。はじめはそれでも割合早いけれどもだんだんのぼって行って海がまるで青い板のように見える、その中の白いなみがしらもまるで玩おも具もちやのように小さくちらちらするようになり、さつきの島などはまるで一粒つぶの緑りよく柱ちゆう石せきのように見えて来るころは、僕たちはもう上の方のずうつと冷たい所に居てふうと大きく息をつく、ガラスのマントがぱつと曇つたり又さつと消えたり何べんも何べんもするんだよ。けれどもとうとうすっかり冷くなつて僕たちはがたがたふるえちまうんだ。そうすると僕たちの仲間みんな集つて手をつなぐ。そしてまだまだ騰のぼって行くねえ、そのうちとうとうもう騰のぼれない処まで来ちまうんだ。

よ。その辺の寒さなら北極とくらべたつてそんなに違ちがやしない。その時僕たちはどうしても北の方に行かなきゃいけないようになるんだ。うしろの方では

『ああ今度はいいよ、かけるんだな。南極はここから八千七百ベエスターだねえ、ずいぶん遠いねえ』なんて云っている、僕たちもふり向いて、ああそうですね、もうお別れです、僕たちはこれから北極へ行くんです、ほんの一寸ちよつとの間でしたね、ご一いっしょ緒したのも、じゃさよならつて云うんだよ。もうそう云つてしまふかしまわないうち僕たち北極行きの方はどんだんだん走り出しているんだ。咽喉のどもかわき息もつかずまるで矢のようにどんだんだんかける。それでも少しも疲つかれあしない、ただ北極へ北極へとみんな一生けん命なんだ。下の方はまっ白な雲になっていることもあれば海か陸かただ蒼黝あおくろく見えることもある、昼はお日さまの下を夜はお星さまたちの下をどんだんだんかけて行くんだ。ほんとうにもう休みなしでかけるんだ。

ところがだんだん進んで行くうちに僕たちは何だかお互たがいの間まが狭せまくなったような気がして前はひとりで広い場所をとつて手だけつなぎ合つてかけて居たのが今度は何だかとなりの人のマントとぶつつかつたり、手だつて前のようにのばして居られなくなって縮まるんだろう。それがひどく疲れるんだよ。もう疲れて疲れて手をはなしそうになるんだ。それ

でもみんな早く北極へ行こうと思うから仲々手をはなさない、それでもとうとうたまらなくなつて一人二人ずつ手をはなすんだ。そして

『もう僕だめだ。おりるよ。さよなら。』

とずうつと下の方で聞えたりする。

二日ばかりの間に半分ぐらいになつてしまつた。僕たちは新らしい仲間と又手をつないでお互顔を見合せながらどこまでもどこまでも北を指して進むんだ。先^{せんころ}頃僕行つて^{あいさ}挨拶して来たおじさんはもう十六回目の大循環なんだ。飛びようだつてそれあ落ち着いてゐるからね、僕が下から、おじさん、大丈夫ですかつて云つたらおじさんは大きな大きなまるで僕なんか四人も入るようなマントのぼたんをゆつくりとかけながら、うん、お前は今度はタスカロラのはじに行くことになつてゐるのだな、おれはタスカロラにはあさつての朝着くだろう。戻りにどこかで又あうよ。あんまり乱暴するんじゃないよつてんだ。僕がええ、あばれませんかると云つたときはおじさんはもうずうつと向うへ行つていてそのマントのひろいせなかが見えていた、僕がそう云つてもただ大きくなすいただけなんだ。えらいだろう。ところが僕たちのかけて行つたときはそんなにゆつくりしてはいなかつた。みんな若いものばかりだからどうしても急ぐんだ。

『この下はハワイになっているよ。』なんて誰か叫ぶものもあるねえ、どんどんどんどん僕たちは急ぐだろう。にわかにはブーツと霧の出ることがあるだろう。お前たちはそれがみんな水玉だと考えるだろう。そうじゃない、みんな小さな小さな氷のかけらなんだよ、顕微鏡で見たらもういくらすすきとおつて尖っているか知れやしない。

そんな旅を何日も何日もつづけるんだ。

ずいぶん美しいこともあるし淋しいこともある。雲なんかほんとうに奇麗なことがあるよ。」

「赤くてが。」耕一がたずねました。

「いいや、赤くはないよ。雲の赤くなるのは戻りさ。南極か北極へ向いて上の方をどんどん行くときは雲なんか赤かあないんだよ。赤かあないんだけど、それあ美しいよ。ごく淡い色の虹のように見えるときもあるしねえ、いろいろなんだ。

だんだん行くだろう。そのうちに僕たちは大分低く下っていることに気がつくよ。

夜がぼんやりうすあかるくてそして大へんみじかくなる。ふつと気がついて見るともう北極圏に入っているんだ。海は蒼黝くて見るから冷たそうだ。船も居ない。そのうちにとうとう僕たちは冰山を見る。朝ならその稜が日に光っている。下の方に大きな白い陸地

が見えて来る。それはみんながちがちの氷なんだ。向うの方は灰のような白いものがぼんやりかかつてよくわからない。それは氷の霧なんだ。ただその霧のところどころから尖ったまつ黒な岩があちこち朝の海の船のように顔を出しているねえ。

『あすこはグリーンランドだよ。』僕たちは話し合うんだ。いままでどこをとんでいたのかももう今度で三度目だなんていう少し大きい方の人などが大威張おおいばりでやって来ていろいろその辺のことなど云うんだ。

『そら、あすこのところがゲーキ湾だよ。知ってるだろう。英国のサア、アーキバルド、ゲーキーの名をつけた湾なんだ。ごらんそら、氷河ね、氷河が海にはいるねえ、あれで少しずつ押おされてだんだん喰はみ出してるんだよ、そしてとうとう氷河から断きれて冰山にならあね。あつちは？ あつちが英国さ、ここはもう地球の頂上だからどっちへ行きたって近いやね、少し間違えば途方もない方へ降りちまうよ。あつち？ あつちが英国さ。』なんてほんとうに威張はつてるんだ。僕たちはもう殆ほとんど東の方へ東の方へと北極を一まわりするようになるんだ。この時だよ、僕らのこわいのは。大循環でいちばんこわいのはこの時なんだよ、この僕たちのまわるもつと中の方に極きょく渦うずといって大きな環わがあるんだ。その環にはいったらもう仲々出られない。卑怯ひきょうなものほそれでもみんな入いつちまうよ。環

のまん中に名高い、ヘルマン大佐がいるんだ。人間じゃないよ。僕たちの方のだよ。ヘルマン大佐はまっすぐに立って腕を組んでじろじろあたりをめぐっているものを見ているねえ、そして僕たちの眼の色で卑怯だったものをすぐ見わけれるんだ。そして

『こら、その赤毛、入れ。』と斯う云うんだ。そう云われたらもうおしまいだ極渦の中へはいってぐるぐるぐるぐるまわる、仲々出ていいとは云わないんだ。だから僕たちそのときは本当に緊張するよ。けれどもなんにも卑怯をしないものは割合平気だねえ、大循環の途中でわざとつかれた隣りの人の手をはなしたものだの早くみんなやめるといいと考えてきろきろみんなの足なみを見たりしたものはどれもすっかり入れられちまうんだ。

そのうちだんだん僕らはめぐるだろう。そして下の方におりるんだ。おしまいはまるで海とすれすれになる。そのときあちこちの氷山に、大循環到着者はこの附近に於て数日間休養すべし、帰路は各人の任意なるも障碍は来路に倍するを以て充分の覚悟を要す。海洋は摩擦少きも却つて速度は大ならず。最も愚鈍なるもの最も賢きものなり、という白い杭が立っている。これより赤道に至る八千六百ベスターというような標もあちこちにある。だから僕たちはその辺でまあ五六日はやすむねえ、そしてまったくあの辺は面白いんだよ。白熊は居るしね、テツデーベージャ。あいつはふぎけたやつだねえ、氷

のはじに立つてとぼけた顔をしてじつと海の水を見ているかと思うと俄かに前肢まえあしで頭をかかえるようにしてね、ぎぶんと水の中へ飛び込むんだ。するとからだ中の毛がみんなまるで銀の針のように見えるよ。あつぷあつぷおぼ溺れるまねをしたりなんかもするねえ、そんなことをしてふぎけながらちやんと魚をつかまえるんだからえらいや、魚をつかまえてこなどは大威張りで又氷にあがるんだ。魚というものは本当にばかなもんだ、ふぎけてさえ居れば大丈夫だいじょうぶこわくはないと思ってるんだ。白熊はなかなか賢いよ。それからその次に面白いのは北極光オーロラだよ。ぱちぱち鳴るんだ、ほんとうに鳴るんだよ。紫むらさきだの緑だのずいぶん奇麗な見世物だよ、僕らはその下で手をつなぎ合つてぐるぐるまわったり歌ったりする。そのうちとうとう又帰るようになるんだ。今度は海の上を渡わたつて来る。あ、もう演習の時間だ。あした又話すからね。じゃさよなら。」又三郎は一ぺんに見えなくなつてしまいました。みんなも丘をおりたのです。

九月九日

「北極は面白いけれどもそんなに永くとまつている処ところじゃない。うっかりはせまわつてふ

らふらしているところなどを、ヘルマン大佐になど見られようもんならさつそく、おいその赤毛、入れ、なんて来るからねえ、いくら面白いたって少し疲れさえなおったら出発をはじめのんだよ。帰りはもう自由だからみんな手でつながなくてもいいんだ。気の合った友達と二人三人ずつ向うの隙すき次第出掛でかけるだろう。僕の通つて来たのはベーリング海かいき海峡ようから太平洋を渡つて北海道へかかったんだ。どうしてどうして途中のひどいこと前に高いところをぐんぐんかけたどこじやない、南の方から来てぶつつかるやつはあるし、ぶつつかつたときは霧ができたり雨をちらしたり負ければあと戻りをしなけあいけないし丁度力が同じだとしばらくとまつたりこの前のサイクルホールになつたりするし勝つたつてよつほど手間取るんだからそらあ實際気がいらいらするんだよ。喧嘩けんかだつてずいぶんするよ。けれども決して卑怯はしない。そら僕らが三人ぐらい北の方から少し西へ寄つて南の方へ進んで行くだろう、向うから丁度反対にやつて来るねえ、こつちが三人で向うが十人のこともある、向うが一人のこともある、けれども勝まけは人数じやない力なんだよ、人数へ速さをかけたものなんだよ、

君たちはどこまで行こうつての、こつちが遠くからきくねえ、アラスカだよ。向うが答えるだろう。冗談じょうだんじやないや、アラスカなんか行くとこはありやしな。僕たちがそ

つちから来たんじゃないか。いいや、行くように云われて来たんだ、さあ通してお呉れ、
 いいや僕たちこそ大循環だいじゆんかんなんだ、よくマークを見てごらん、大循環と云われると大
 抵いたれ誰たれでも一寸顔ちよつといろを和やわらげてマークをよく見るねえ、はじめから、ああ大循環だ通
 してやれなんて云うものもそれあるよ。けれども仲々大人なんかにはたちの悪いのもあ
 るからね、なんだ、大循環だ、かつばめ、ばかにしやがるな。どけ。なんてわざと空っぽ
 な大きな声を出すものもあるんだ。いいえどかれません、じゃ法令の通りボックシングを
 やりましようとなるだろう、勝つことも負けることもある、けれども僕は卑怯きせうは嫌いだか
 らねえ、もしすきをねらつて遁にげたりするものがあつてもそんなやつを追いかけやしない、
 あとでヘルマン大佐につかまるよつてだけ云うんだ。しずかな日きまつた速さで海面を南
 西へかけて行くときはほんとうにうれしいねえ、そんな日だつて十日に三日はあるよ、そ
 う云うふうにして丁度北極から一ヶ月目に僕は津軽海峡を通つたよ、あけがたでね、函はこだ
 館ての砲台ほうだいのある山には低く雲がかかっている、僕はそれを少し押しながら進んだ、海
 ずめが何重もの環わになつて白い水にすれすれにめぐっている、かもめも居る、船も通る、
 えとろふ丸なんて云う荷物を一杯に積んだ大きな船もあれば白く塗ぬられた連絡れんらく船もある。
 そうそう、そのとき僕は北海道の大学の伊藤さんにも会つた。あの人も気象をやつてるか

ら僕は知っている。

それから僕は少し南へまっすぐに朝鮮へかかったよ。あの途中のさびしかったことね、僕はたった一人になっていたもんだから、雲は大へんきれいだっただし邪魔じやまもあんまりなかったけれどもほんとうにさびしかったねえ、朝鮮から僕は又東の方へ西風に送られて行つたんだ。海の中ばかりあるいたよ。商船の甲板でシガアの紫の煙けむりをあげるチーフメートの耳の処で、もしもしお子さんはもう歩いておいでですよ、なんて云って行くんだ。船の上の人たちへの僕たちの挨拶は大抵斯こんな具合なんだよ、

上の方を見るとあの冷たい氷の雲がしずかに流れている。そうだあすこを新らしい大循環の志願者たちが走って行く。いつ又僕は又循環へ入るだろう、ああもう二十日かそこらでこんどのは卒業するんだ、と考えるとほんとうに何とも云えずうれしい気がするねえ。」

「おらの方の試験ど同じだな。」耕一が云いました。

「うん、だけどおまえたちの試験よりはむずかしいよ。お前たちの試験のようなもんならただ毎日学校へさえ来ていれば遊んでいても卒業するだろう。」又三郎はきつと誰たれか怒おこらるうと思つて少し口をまげて笑いながら斯う云いました。

「おらの方だて毎日学校さ来るのひでじやい。」耕一が大して怒つたでもなしに斯う云い

ました。

「ふん、そうかい、誰だつて同じことだな。さあ僕は今日もいそがしい。もうさよなら。」
又三郎のかたちはもうみんなの前にありませんでした。みんなはばらばら丘をおりま
した。

九月十日

「ドツドド、ドドウド、ドドウド、ドドウド、ドドウ、

ああまいざくろも吹き飛ばせ、

すつばいざくろも吹き飛ばせ、

ドツドド、ドドウド、ドドウド、ドドウ

ドツドド、ドドウド、ドドウド、ドドウ。」

先頃又三郎から聴いたばかりのその歌を一郎は夢の中で又きたのです。

びっくりして跳ね起きて見ましたら外ではほんとうにひどく風が吹いてうしろの林はま
るで咆えるよう、あけがた近くの青ぐろいうすあかりが障子や柵の上の提灯箱や家中

いっぱいでした。

一郎はすばやく帯をしてそれから下駄げたをはいて土間に下り馬屋の前を通って潜りくぐをあけましたら風がつめたい雨のつぶと一緒いっしょにどうつと入って来ました。馬屋のうしろの方で何かの戸がばたつと倒れ馬はぶるるつと鼻を鳴らしました。

一郎は風が胸の底まで滲しみ込んだように思つてはあと強く息を吐はきました。そして外へかけ出しました。

外はもうよほど明るく土はぬれて居おりました。家の前の栗くりの木の列は変に青く白く見えてそれがまるで風と雨とで今洗せんたく濯たくをするとでも云うように烈はげしくもまれていました。青い葉も二三枚飛び吹きちぎられた栗のいがは黒い地面にたくさん落ちて居りました。

空では雲がけわしい銀いろに光りどんどん北の方へ吹きとばされていました。遠くの方の林はまるで海が荒れているようにごんごんと鳴ったりざあと聞えたりするのでした。一郎は顔や手につめたい雨の粒つぶを投げつけられ風にきものも取って行かれそうになりながらだまってその音を聴きすましじつと空を見あげました。もう又三郎が行つてしまったのだらうかそれとも先頃せんころ約やく束そくしたように誰かの目をさますうち少し待つて居て呉れたのかと考えて一郎は大へんさびしく胸がさらさら波をたてるように思いました。

けれども又じつとその鳴つて吠ほえてうなつてかけて行く風をみていますと今度は胸がどかどかなつてくるのでした。昨日まで丘や野原の空の底に澄すみきつてしんとしていた風どもが今朝夜あけ方俄にわかに一いっせい斉に斯う動き出してどんどんどんタスカカラ海かいしやう床の北のはじめをめがけて行くことを考えますともう一郎は顔がほてり息もはあ、はあ、なつて自分までと一緒に空を翔かけて行くように胸を一杯にはり手をひろげて叫さけびました。

「ドツドドドドウドドドウドドドウ、あまいざくろも吹きとばせ、すっぱいざくろも吹きとばせ、ドツドドドドウドドドウドドドウ、ドツドドドドウドドドドドドウ。」

その声はまるできれぎれに風にひきさかれて持つて行かれましたがそれと一緒にうしろの遠くの風の中から、斯ういう声がきれぎれに聞えたのです。

「ドツドドドドウドドドウドドドウ、

櫓ならの木の葉も引つちぎれ

とちもくるみもふきおとせ

ドツドドドドウドドドウドドドウ。」

一郎は声の来た栗の木の方を見ました。俄かに頭の上で

「さよなら、一郎さん、」と云つたかと思つたとその声はもう向うのひのきのかきねの方へ

行っていました。一郎は高く叫びました。

「又三郎さん。さよなら。」

かきねのずうつと向うで又三郎のガラスマントがぎらつと光りそれからあの赤い頬ほおとみだれた赤毛とがちらつと見えたと思うと、もうすうつと見えなくなつてただ雲がどんどん飛ぶばかり一郎はせなか一杯風を受けながら手をそつちへのぼして立っていたのです。

「ああ烈ひで風だ。今度はすつかりやらへる。一郎。ぬれる、入れ。」いつか一郎のおじいさんが潜りの処でそらを見上げて立っていました。一郎は早く仕度をして学校へ行つてみんなに又三郎のさようならを伝えたいと思つて少しもどかしく思いながらいそいで家の中へ入りました。

青空文庫情報

底本：「ポラーノの広場」新潮文庫、新潮社

1995（平成7）年2月1日発行

1997（平成9）年5月25日3刷

入力：土屋隆

校正：高柳典子

2008年3月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

風野又三郎

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>